幕内瓦版　創刊号

発　行　日本劇場技術者連盟

会員の声

■連盟設立にあたって！！

日本劇場技術者連盟に参加できたことに嬉しく思います。

劇場技術者の仕事を広く社会一般にご理解いただける機会ができたと思います。

今の状態を少しでも良い方へ前進させられれば幸いです。全国の劇場、ホールの関係者の皆様、また劇場技術に関心がある方もない方も是非一度、連盟（ＴＥＥＣ）の、これからの活動にご期待ください。

［高橋三十四・埼玉県］

■昔話を若者にも！

最近、小屋の練習スタジオを利用した若者とふとしたことで交わした会話の中のことです。

若者は高校２年生のロックバンドのリーダーでした。

夏に小屋で開かれるロックフェスティバルの話をしていると、ひょんな事から昔懐かしいフォークグループの「アリス」というグループが大好きだといい、その中でも谷村新司さんは味があっていいなどと言う話になり盛り上がってしまいました。

年が３０も離れているというのになんだか親近感がわいてきて、しみじみするものがありました。

たまには若者と何気ない話で盛り上がるのも、若返りの秘訣でしょうか。

［出井稔師・宮崎県］

■アナログ爺々の空念仏

昔も今も大切な用件を相手に伝えたり、相談したりする場合は直接本人に会って話し合うのが最良の方法であり、次の手段として、手紙や電話でのやりとりがあります。自分は、今でもそれがベストと考えおります。

ところが最近の世の中、一瞬のうちに「ＦＡＸ」「携帯電話」「パソコン」などに連絡方法が変わってしまい、大変便利にはなってきましたが、困ったことに自分などは機器に追われ、気持ちとお金に行詰り、ストレスだけがたまってきました。そして、人間関係の問題にも疑問を感じております。

音響の仕事も生（ナマ）の音声をお客さんが自分で耳にしっかり聞ける芸の世界を大切にして、機器の芸より、身体の芸が育って行くことを願っている昨今です。

［本　輝夫・石川県］

■ミートホープとか、コムスンだとか

現場は死に物狂いに働いているのに、経営者の欲でつまずいて社員の将来を奪うというケース、増えていますね。

最近、俺が責任とると見得を切る人が、周りにいますか。いなくなりましたね。政治家も同様で、むなしい。

中小企業の何人もの経営者と話したことありますが、全員、社員の家族が路頭を迷わないように頑張るのが社長だ。だから会社は作るよりも潰すほうが難しいのだ、と言っていた。この社長さんたちの会社、不景気を持ち堪えて、今は元気な会社に蘇っています。

こういう世の中、水戸黄門が出てきて直してくれると思っていては埒が明きません。黙って任せておいたからダメになってしまったのですから、今度は任せておけないと奮起しなければ自分を守れない時代が来たようです。　［八板賢二郎・東京都］

■入会しての抱負

日本劇場技術者連盟設立に当たり、会員として誕生の瞬間に立ち会えたことを大変光栄に存じます。

さて、連盟の会員としての抱負を一言述べさせていただきます。

舞台監督・照明・音響には各種協会等がありますが、今回のようにホールに関わる全ての業種の人々が集まれる機関があることは、大変画期的なことと思います。

今後、同業種の方との技術の向上や、異業種の方とのつながりを大切にして、社会に貢献できればと考えています。

最後に私は連盟内において若輩者ですが、諸先輩方の一助を勤められれば幸いであります。

［羽田野晉嗣・東京都］

自分たちだけの話から抜け出よう！

■日本中の劇場やホールを文化の生産工場にしてみませんか

幕内瓦版の始まりです。ひとりごとも仲間に伝わります。

劇場技術者として一番うれしかったことを思い出せば、自分が所属した「彩の国さいたま芸術劇場」で再び劇作りに関われるようになったことでしょうか。

演劇を目指したころの劇場は、小劇場やアトリエで、そこは「劇をする場」でした。劇場の大小にかかわらず今も変わらないのは、人々に感動を与える劇作りをしたいと考えていることです。

90 年代に造られた、さいたま芸術劇場は専門劇場として、舞台機構設備などの多機能化やコンピュータが導入され劇場技術が変革されました。劇場が進化すれば演出も多角化し、そこで働く劇場技術者の仕事は複雑化します。それに対応すべく劇場技術者も技術力の向上が求められました。

また、劇場やホールではさまざまなパフォーマンスに対処しなければならず、広い知識を要します。劇場で上演されるものすべてに対して、劇場技術者の仕事の懐は自ずとして深くなっていくのです。

日本全国に劇場やホールが点在していますが、問われるのはその中身でしょう。広い意味でとらえれば観客席と舞台さえあればどこでも劇場です。人々に感動を呼ぶ上演をしてファンが増え続ければ、きっと劇場の未来は開けるでしょう。

そのためには、劇場技術者の才能の開花がこよなく待たれているはずです。まず、劇場技術者が、音楽好き、演劇好き、パフォーマンス好きであればいいと思います。何かを作りたくなったら、練習場や稽古も求められるでしょう。劇場やホールを文化の生産工場にしてみませんか。

［齋藤譲一・東京都］

■管理する側の気持ち

職場が 30 周年を迎え、記念事業で何かと忙しい。30 年を顧みると、つい 2 年前までは何も変わっていなかったのに気づいた。2 年前とは「指定管理者制度」である。

この制度は、我々に反省を促した。それまでは、「前例に則り」で業務をし、ただ歳月が流れていた。これからも同じ形でと思っていたら、とんでもないことでした。このことに気がついただけでもハッピーである。

今、我々は、自分たちからアピール、宣伝、改善、サービスなど、できるものから変革している。これで会館利用者の反応はよくなった。

具体的には、次のようなことである。

1．指定管理者に任せられた範囲内で、運営方法改善。利用延長の緩和などをした。
2．申し込みのとき現金支払いを緩和し、利用者の都合に応じるようにした。
3．施設の外周りに大きな看板を立てて公演の案内をし、会議室などの施設の利用案内、利用者のポスターを掲示する掲示板を設置した。
4．利用日 2 ヶ月前に小ホールが空いているとき、リハーサル室として貸し出した。
5．職員は仕事に慣れた頃、移動してしまい、利用者に迷惑をかけるので、打ち合わせ等の業務も委託会社に任せた。

当たり前のことをやったのだが、利用者はこれを待っていたのである。

［山形　等・北海道］

■おはようございます。～お疲れ様。

おはようございます。

この言葉で始まる仕事に携っている大きな劇場、小さな劇場、大都市のホール、地方のホール、そしてコンサート･演劇･イベントなどの技術スタッフの皆さん！

皆さんとコミュニケーションをとり協力し合える場、情報交換しあえる場となる日本劇場技術者連盟の設立に参加し、協力できて嬉しく思います。

舞台の仕事に携ってもう３０年以上、これからも舞台の仕事をし、最後に皆さんに心のそこから、お疲れ様でした！　と言えるようにガンバリマス。

一人ひとりの声は小さくても、大勢が集まれば大きな声になります。

［五十嵐裕・群馬県］

連盟の声

★連盟の目指すところ

私たちの世界には、地位が低い、確立されていないと嘆く人が大勢います。しかし、どのようになれば地位が高くなったと思うのかを訊ねても、明確に答えられる人は少ないようです。お金がたくさん取れればいいのか、ポスターに自分の名前が大きく乗ればよいのか、確定申告の職業欄に自分の職種があればよいのか、叙勲の対象になればよいのか・・

ステータス向上を大きな目標に掲げている本連盟としては、そこが知りたいところであります。

また、プロとはどういうものかと訊ねても同様です。米国では、年収でプロかどうかを判断するという話を聞いたことがあります。英国で仕事をするとき、自分の名前がクレジットされた公演プログラムを持ってこいと言われたこともあります。

オーストリアのマイスター(親方)制度では、マイスターの資格を有した人の中から、劇場の幹部会議で選ばれてマイスターに就任するそうです。

弁護士は弁護士会に所属しないと弁護士活動ができません。能楽師も能楽協会に所属しないとプロとして認められません。そこには、不始末をすると、すぐに除名にされる厳しさもあります。プロには、プロとしての責任が付きまといます。名刺に、○×デザイナーと書けばプロになれる業界でいいのだろうか。考えてみたい。

連盟はまず、虫眼鏡でしか見ることのできない小さな文字でもよいので、スタッフ全員をクレジットしてもらうことから活動しましょう。映画のエンドロールのように。クレジットは、スタッフの責任を明確するもので、封建的な格付けではありません。責任が伴うからプロは成長するのです。

また、機構操作や美術進行の人たちの能力検定が必要です。もう一度、劇場技術者全体の仕組みを考えて、自分たちだけでなく、すべての劇場スタッフが一つにならないと夢は叶いません。

民衆に夢を売っている私たちが、夢の無い毎日を送っていたのでは、素晴らしい仕事はできません。

誰かが叶えてくれるのを待つのではなく、自分たちの力で掴みましょう。

TEEC の目指すのは、そこです。

★技能労務職員の給料

民間に比べて給与水準が高いといわれている電話交換手、自動車運転手、バス運転手など技能労務職員について、総務省が比較調査をしてその結果を発表しました。

それによると、都道府県と政令都市の職員は、民間に比べて 1.4～1.8 倍も高いということでした。技能労務職員は、全自治体で 18 万 9000 人います。

労務省は理由について「一般行政職との均衡が重視されてきたため」と分析している。良いことではありませんか。

そして全自治体に対して、見直しを含めた総点検を指示しました。

これで、また一般行政職（事務方）と技術職との差別が始まるのでしょうか。
ここは、民間の技能職の給与を引き上げるように動いて欲しいものです。

文句を言わずに、黙々と働くものだから、いつも割を食ってしまっている技能労働者。

だから劇場技術者も、低く扱われているのでしょうか。

「技能」という言葉を使わないほうが良いのではないでしょう。

ノーベル賞に値する発明をしても報われないのが日本社会。美しい国になろうとしている?この国で、私たちはどのようにしてステータスを高めたら良いのでしょうか。

危険な仕事ということだけで、果たして評価されるのでしょうか。様々な疑問が湧いてきます。

これを解決するもの、TEEC の役目なのです。

参照サイト → 技術者蔑視の風潮

●７月 30 日（月）、裏方の教養講座「歌舞伎モノがたり」は、会員・会友は参加費無料です。パーティーは会費 500 円です。
この講義の模様は DVD にして、希望者に頒布します。

●幕内＝演劇で，幕の内側，すなわち，俳優・大小道具・衣装・床山・作者など直接芝居をつくる者の総称。

幕内瓦版　創刊号
発　行　日本劇場技術者連盟
発行人　齋藤　譲一
編集人　八板賢二郎
発行日　2007 年 7 月 10 日
179-0085 東京都練馬区早宮 1-27-19

幕内瓦版　第弐号

発　行　日本劇場技術者連盟

会員の声

■劇場の仕事への思い

こんにちわ。劇場で働く人たちには大きく分けてやっつけ的なタイプと創造的なタイプとが存在していると思います。どちらのタイプでも間違いではないと思います。仕事と割り切って安全、確実に管理、進行していくことは基本ですし大切なことです。しかしそこに劇場技術者なりの客観的要素を一つでも提案し、アレンジできれば(主催者と合意の上) 出演者も客席もそして裏方としての自分も満足感に満たされ感動を与え、受けることができるのではないでしょうか。裏方ができるのは技術提供だけではなく気持ちよく本番を向かえてもらうことや出演者たちの緊張を解きほぐし 100%の実力を発揮できるように安心感を提供してあげ ることも時には大切な仕事だと思い続けています。

劇場は市民のコミュニティーの場であり劇場のスタッフ皆がサービス業であると考えてるひとりです。そしていつしか裏方業も理解され、やりがいを感じる職種へとなっていくと思います。

（村山貴洋・静岡県）

■何事も人が為すこと

学生を終えてさまよい、世間の風にあたって間もないころ、今の職場に腰を下ろしました。

それから 30 年があっという間に過ぎ、今、その頃を思い出します。

久しぶりに「薪能」の舞台総合プロデュースを任されたので、その感想を書いてみます。

本番当日に、出演の野村万作氏が人間国宝に指名されたとの新聞報道があり、公演に花を添えた感がありました。

30 年間で「薪能」は３回担当させていただきましたが、「温故知新」なるものをしらされました。

伝統芸能は変わらぬ形で継承していくものですが、舞台周りはかなり変わりました。

今回の舞台は、滝のように流れる噴水を背景に、その前の池の上に組み立てることになり、地組が大変でした。ちなみに、本番は水音が邪魔なので、滝の流れを止めて行いました。

舞台は橋の工法を引用した「トラス」を使いクレーン車で組み立て、出演者の要望で舞台全体を屋根で覆いました。また、多少の雨でも決行したいということもあって、舞台全体に高さ８ｍの幕も張りました。

70 名くらいのスタッフが各自持ち場の作業をして、一つの目的に向かって黙々と動いて、会場全体に熱気が舞い、降水率 75%の天気予報は０％になり風も収まり、天候までも変えてしまったようでした。

スタッフが使う道具、操作する機材は進化し軽くて丈夫になったとか、アナログからデジタルに変ったとか、軽量な灯具で明るい照度が得られるとか、いろいろと技術革新はあっても、やはり人と人とのコミュニケーションの大切さは変わらないと気づきました。

「信頼」とは、相手を「尊重する」気持ちを持ち得ないと生まれないものです。

専門分野が異なっていても、相手を尊重して信頼しあって協調するという気持ちを常に持ちたいものです。

今回の仕事で、技術的なことより人間関係の大切さ再認識し、自分が一つまた大きくなった気がしました。

技術も人間も「温故知新」によって、進化するのではないでしょうか。

（山形等・北海道）

■それぞれの責任

舞台に係わる人々（出演者、裏方技術者、制作、お客様、他）が資格という存在に無関心が多いような気がします。また舞台に係わる方々にはそれぞれの団体があり、その団体の発行する認定資格があります。その資格をそれぞれの団体がなかなか認めようとしてないのも現状ではないかと思います。

これからは、自分だけの世界ではなく、お互いの立場や違いを認め、思い遣ることが必要です。それが、この業界に携わるための暗黙の資格です。

そうなることで、私たちを広く社会に認知させていくことが出来るのではないでしょうか。

（出井稔師・宮崎県）

■なぜ今文化施設の活性化なのか

日本中にある文化会館やホールや劇場は、好調な経済が反映した建設ブームを過ぎた今も増え続けています。公立だけでなく民間も入れるとおそらくその数は三千くらいに及ぶでしょう。その中で、地域における文化的生活の象徴になるはずだった公立のホールや劇

自分たちだけの話から抜け出よう！

場も、地方財政悪化等により十分な事業費や管理運営経費が確保されていません。活動の停滞という状況を招く恐れが、大きくなっています。さらに、地域の住民や有識者から活動が必ずしも活発でないという批判を受けているところも少なくありません。文化施設は、さまざまな文化の活動拠点であるはずなのに、それに逆行してしまうかのようです。

また、そこで働く人たちが「指定管理者制度」の導入で厳しい立場に立たされています。ポスト成果主義を期待されたのですが、仕事にやる気をなくす阻害要因のマイナスが増えてしまったからです。良くなるはずの民営化、合理化の改革のもとに、働く人たちの処遇にも格差を生むだけでした。人事評価制度の導入賃金制度の変更も効果がなかったようです。幸せを感じる人は少なく、自己申告が理解されないとむしろ大方の人々が納得していません。福利厚生や給与、作業条件の多忙化などの不満足要因が多くなり、会社の方針から管理・監督への失望が高まり、職場の人間関係までぎくしゃくさせてしまっています。

同士の方々へのお願いです。日本劇場技術者連盟は即刻この問題を取り上げようではありませんか。

文化は心の良薬のはずです。どんなときでも人々に生きるエネルギーを与えられるのが文化の役割です。私たちの仕事への情熱を増大させる促進要因に向けて、活動を進めましょう。（齋藤譲一・東京都）

■インタビュー

日本音響家協会「音響家が選ぶ、優良ホール100選」に選ばれている津田ホール
（日本音響家協会機関誌より転載 / 抜粋）

津田ホールは、東京・JR中央線・千駄ケ谷駅の目の前の一等地にある。隣に東京体育館、少し離れたところに国立競技場と国立能楽堂がある。スポーツと芸能の観客でごった返すところである。この地は、まさに人間の心を癒し、元気をくれる別天地であるかのようである。
1988年に開場した津田ホールは、音楽の創造を支え続けている。

津田ホールの運営方針など、私たちにとって興味深いことを、マネージャの山内毅さんに伺いました。

Q　津田ホールは、津田塾さんが経営する施設ですが、津田塾はどのように事業をしていらっしゃるのですか。

山内　私ども津田ホールの母体は、財団法人津田塾会と申します。その歴史は、1947年（昭和22年）に、母校である津田塾大学の運営を支えることを目的に設立されました。当初は、津田英語会と津田スクール・オヴ・ビズネスの二つの事業から出発しました。現在は、津田国際研修センター、津田日本語教育センターと津田ホール、あわせて５つの事業を行っております。津田ホールは、財団設立の40周年記念として津田スクール・オヴ・ビズネスの学校講堂という形で作られました。

Q　貴ホールはクラシック専用ホールですね。20年経って建材も乾き、ますます良い音になっていると思いますが。

山内　はい、ホールは490席のシューボックス型です。この言葉に聞きなれない方もいらっしゃるでしょう。靴箱のように長方形の四角い形をし、プロセニアムもなく、幕類もありません。早い話しが、クラシックコンサート専門ホールというわけです。空席時の残響は1.6秒程度あり、室内楽の演奏に非常に適しています。建築音響は、永田音響設計さんです。響きと音の定位は相反する性格のものですが、津田ホールの場合、この二つの要素が絶妙です。手前味噌ですが、時々よその同規模のクラシック専門ホールで音を聴きますが、「ああ、やっぱりウチはいいなあ･･･」とつくづく思います。

Q　私はいつも、このホールの前を通っています。いつもポスターを見て、すごく広範囲の催しをやっているなと感心しています。

山内　ホールの性格上、利用できる催物には制限があります。コンサートに関して申し上げれば、クラシックなどの生楽器を主とするものを原則としております。邦楽でもご利用いただいております。

Q　スタッフは少人数でやっていると思いますが、一人何役ぐらいやっているのですか。

山内　数えられないくらいです。昨今の指定管理者で、公共ホールの技術スタッフも他の仕事を兼務するところが増えているようですね。津田ホールは、オープン当初より技術スタッフが事務も兼務する形で運営している特殊な運営形態です。ですから、技術スタッフは出向や派遣ではなく正職員です。

Q　いつも感心するのですが、貸レコーディングスタジオの技術者もコーヒーを入れたり、請求書を書いたりしながら、キチンと録音している。みなさんは、それ以上に大変なことやっていますね。

山内　私たちがやっているのは、一般のホールで行われているほとんどすべてです。

例を挙げますと、電話や来客応対、ブッキング処理、利用料計算、請求、収納、その他事務の雑務。そして空調運転管理の他、営繕的な仕事。主催公演のチケット予約および販売。主催公演時の表方業務。これらを通常の技術的な仕事の合間にやっております。スタッフは、技術として私を含め５人。主催公演を企画制作するプロデューサーは委託で１人、会計担当は契約で１名、計７人です。警備と清掃は別に契約しています。私はこの他に、勤怠管理、予算管理、稼働率管理、修繕計画等の業務が他にあります。

津田ホールの考え方は、事務選任を減らし技術スタッフを増やす。その技術スタッフがすべてを運営することです。舞台の仕事は危険ですから技術を減らすことは絶対にできません。ならば技術者を増やし、他の業務を兼務させるという発想で経費削減しております。

また、ローテーションで誰もが同じ仕事ができるように配慮しています。これらは、運営上とても良い効果を生み出しています。例えば、技術的なお問い合わせがあっても誰もが即答できます。あるいは下見の連絡があり、それを取次いだ者が施設をご案内し、実際の公演日も担当することで、お問い合わせの段階から責任を持った提案ができるなど、お客様のいつも身近に居る感じがあります。

Q　そのような形は、これから公立ホールでも望まれることだと思います。私も、現在の職場で、そのように仕向けていますが、お役所仕事に慣れてしまっている職員が多く、そこに到達するのは難しいですね。客商売や経営の基本は、そこにあるわけです。

公立施設では、良いことでも抵抗勢力が必ずいて、実現させない。そこには、職員個々のプライドとか手柄とか損得ばかりが先行しているからですね。これまでは無駄遣いばかりやってきたが、もうそれはゆるされない。無駄を省くことこそ経営努力です。

民間は、客に合わせて柔軟に対応しなければ経営が成り立たない。柔軟に対応するから、評判が良くなって、次も来る。

山内　まさにそうですね。お陰様で津田ホールは、リピーターが多いです。常連のお客様からは、「いつもここに来るとホッとするねぇ。」といっていただけます。本当にうれしいです。だから、私たちは自分の職場に誇りを持っています。

Q　公共施設に比べて、やりやすいこともあるでしょう。

山内　組織が小さいですから、小回りが利きます。例えば、規定に照らし合わせて考えても問題が解決しないようなケースがあったとします。その場合は、過去の経験から判断して新たな内規を作ることがたまにあります。これも５人の技術スタッフの現場判断で可能ですし、作り上げるまでの期間も短いですから、お客様のニーズに即対応できます。

また、職員の異動がありませんから、職員の一体感がありますし、職場に愛着もわきます。

Q　部署ごとの会話がないと、互いに非難合戦になります。できるだけ頻繁に打ち合わせするなどして、会話があると快適な職場になります。その点、必要最小限のスタッフでやっていると、風通しがよくなり、素晴らしい発想も生まれてきますね。

山内　そういえば私たちは、メールで打ち合わせすることが日常です。全員揃うことがめったにありませんから、日常の打ち合わせや申し送りはメールがほとんどです。メモを書いて回覧するより早くて確実です。全員携帯に転送していますから休みの者でもすぐ返事が返ってきます。

話を戻しますが、逆に民間にとってやりにくい点もあります。ご承知のように料金的に民間は不利ですね。勝負という表現は良くありませんが、公共施設のように一桁違う金額までお安くできないところに、太刀打ちできない壁があります。その分、お客様優先の考え方が必要ですし、いつも収支を意識する必要があります。

民間は、収支が合わなければ運営していけません。もちろん広報宣伝費という考え方もありますが、津田ホールに関して言えば、独立したひとつの事業ですから、赤字になることは絶対に許されません。

Q　しかし公立の場合、使用料は安いが親身になって公演を助けようとしない。スタッフを連れて行かないと成り立たないことが多い。公立は指定管理者制度になって四苦八苦しています。ぶらぶらしている無駄な人間が多過ぎるのですよ。民間ホールには、少数精鋭で本物の人材が揃っていて、知恵を貸してくれる。主催者に

とって、どちらが得なのかが問われる時代です。これからは、公立ホールのスタッフは、民間の劇場やホールに行って研修すべきだと思います。

山内　そうですね、民間にはさまざまな英知があると思います。それぞれみなさんが苦労されて努力されていると思います。私事ですが、先日、財団法人地域創造という団体が主催した公共施設事務職員向けのセミナーで、津田ホールの運営の仕方をお話しする機会を頂きました。規模や用途が違いますからすべてそっくり同じようにはできないと思いますが、津田ホールあるいは、他の民間ホール運営の考え方は、これからの公共施設運営の参考になると思います。

Q　ホールの経営は、限られた人材と予算の中で、知恵を出さなければうまく行きませんね。どのようなことをモットーとしていますか。

山内　これまで述べたことも含めて、次のようなことを大切にしています。

まず、サービス業であることの自覚です。

これは、特に技術スタッフは、お客様の最前線にいる立場であり、技術を売っているだけではいけないと注意しています。「ありがとうございました。またよろしくお願いします」が言えない技術では困ります。民間の場合は営業必須です。

次に、誰でも同じことができるようにすることです。少ない人数で回すためには、誰でも同じことができなければなりません。先輩後輩は無関係でローテーションを組みます。

そして、マンネリにならないことです。

特に貸館業務はマンネリになりがちです。このお客様は、今日この本番のために長い間をかけて準備や稽古をしてきたのだから、この一瞬の時間を最高に演出してあげようという、そんな気持ちを忘れないよう心がけております。
その上に、提案をしてあげます。

自分の施設のよりよい使い方を一番よく分かっているのは、自分自身なのですから、積極的に提案をするようにしております。

また、自分たちで修理、修繕、製作をできるものは、自分たちでやるようにしています。
経費削減と技術向上につながります。

その他、これはモットーとはいえませんが、技術スタッフには、積極的に外の仕事もやるように勧めています。他の現場を知ることで見えてくるものが沢山ありますし、津田以外で得られる貴重な技術習得があります。また、業界の発展や後輩の育成にも取り組むよう勧めています。何より、このような苦労を買って出ることでスタッフの質の向上にもつながると思います。

Q　それは客商売や経営を考えるときの基本です。前向きですね。これからは、さらにどのようなことを望みますか。

山内　公共ホールの運営は、指定管理者制度によって、さまざまな問題点を浮き彫りにしています。それはある意味とても良いきっかけだと思います。

公共ホールは、市民に対してどうあるべきかという根本と経費とのバランスを考えるべきです。ただの箱ではいけない、発信型の施設でなければいけない。しかし経費のことも考える必要がある。つまりアートマネージメントの難しさですね。この厳しい状況が、国あるいは国民全体に理解されれば、補助金などのサポート体制はもっと良い方向にいくのではないでしょうか。

そのためには、ホール関係者が、公民問わず、また事務職、技術職問わず、もっと交流の場があってもよいと思います。全国ホール協会が解散して4年が経ちます。公立施設の団体としては公文協がありますが、民間との交流はないと思います。民間は、他の施設との交流がありません。

時代に即した新しいホール関連の協会の誕生が必要だろうと思います。そして、私たちが芸術育成発展のため、地域振興のためにどのようなことができるか、もっと高い次元で語りあえると良いと思います。

Q　これまでは補助金によって、公共ホールを堕落させてきました。補助金があると知恵を出さなくなり、そして働かなくなる。一度、厳しい道を通って、正しい補助金の活用を考えなければ、国民から見捨てられます。

先日、新聞の投書欄に「役所が無駄遣いするほどお金が余っているならば、税金を少なくしろ」と、15歳の少年の声が掲載されていた。公共ホールは、そこから出直す時代が到来したようですね。（取材・八板賢二郎）

連盟からのお知らせ

去る8月24日（金）、齋藤理事長・八板理事・高橋監事は、埼玉県舞台技術協議会理事長の瀬々至氏と副会長で本連盟会友パシフィックアートセンターGMの小川富市氏をお招きして、舞台技術者のこれからについて、意見交換をしました。そこで、多くの情報を得て、とても意義深いものとなりました。
現在、厚労省の舞台機構調整技能士・音響を初めとして各団体が社内検定的な形で資格認定を実施していますが、資格取得後のフォーロがなく、資格の恩恵は受けていないのが現実です。
本連盟では、新たに試験制度を設ける前に、現在の資格認定者がどのようにしたら社会的に認められ地位と生活が守られるかを研究し、これまでの体質から脱却して、技能向上だけでなく劇場技術者の在り方まで変革して、劇場文化を支える立派な人材の育成に力を注ぎたいと考えています。
また、全国の公立ホールの数は2,500にも及んでいます。一部には、「指定管理者制度」に耐え切れないで廃館した施設も目立ってきました。
そこには、芸能文化などに無理解の人たちが、人気取りの選挙目当てのために、隣の県や市も建てたからと競って建設した施設が数多なのです。
かつて批判された箱物行政の結果であり、単に民営化という名の下に「指定管理者制度」が誤った方向に行ってはならないのです。
運営費削減などによる問題点も明らかになりました。本来必要であるはずの設備修繕ができなかったり、正職員の数を減らされたり解雇されたり、日常管理をアルバイトやパートで対応させるなどといった「手抜き管理」も問題です。
「弾力性や柔軟性のある施設運営」が建前ですが、実際には条例や施行規則に阻まれたりもします。
何れにせよ、難しい名称の「指定管理者制度」でありますが、公営組織の法人化や民営化は避けては通れない時代になりました。
最近では、知恵を絞り、様々な手を使って、苦しい予算の中、楽しむかのように夢を抱いて運営している指定管理者を見かけます。
日本劇場技術者連盟は、さらに多くのことを学習しながら、技術力だけでなく、経営力、政治力を身に付けることで、広く国民の理解を得た劇場技術者としての集団を目指したいと考えています。
なにより、明日を築く若い人たちの意見を最優先に取り入れ、若い人自らが立ち上がることにより、自らの世界を築いていけるような夢の仕掛けをしたいともくろんでいます。

発　行　日本劇場技術者連盟
発行人　齋藤　譲一
編集人　八板賢二郎
発行日　2007年9月23日

幕内瓦版　第参号

発　行　日本劇場技術者連盟

■日本劇場技術者連盟、おかげさまで２年目を迎えました

理事長　齋藤譲一

日本劇場技術者連盟は昨年５月に創立されて以来、おかげさまで２年目を迎えました。初年度については、創立という気運が先行し使命感で気負い過ぎたかもしれません。しかしながら、劇場やホールが厳しい社会状況に置かれる中、日本の劇場技術者の未来が開けるように少しでも役立ちたいとの思いで、初年度会員はまとまってきました。あっという間の１年でしたが、当連盟の果たすべき役割を明確にし、めざす方向性をいくらかですが各方面に示していけたことはうれしい限りです。

また、日本のあらゆる地域を視野に入れ、舞台進行、舞台照明、舞台音響、制作など各分野を問わず、劇場やホールを支える者であればだれもが参加できる連盟を目指しました。

日本劇場技術者連盟は民主的な運営を心がけ、この組織をピラミッド型の上下関係の縦割り社会にするのではなく、むしろ逆さピラミッド型にして交流し合い横のつながりを大事にしようというものです。２年目を迎え、この５月の総会で新役員の改選もあり、新体制が確立しました。

６月には、さっそく第１種と第３種の技能検定が桶川市民ホールで開かれました。自己の研鑽に努め劇場技術者の仕事に誇りを持ち、その存在を社会の多くの人々に認めてもらうために「市民とともにある劇場技術者」をめざしていきたいと思います。

■アナログ爺は「心配症」

このごろ自分のやっている仕事の目的は何か？と考えることがよくあります。

原点は舞台で上演それる芸事という「お花」が育つように、土を耕し、草取りをして、肥料を与えて、きれいな「お花」が咲きそろうよう行動することだと思います。

ただ、土を耕し草取りに汗を流すのはいいのですが、肥料は花の育つ姿を見ながら加減しないと、やり過ぎて枯らしてしまいます。その辺が自分たちの仕事のように難しいところと考えます。

樹木などは枝打ちをすると元気が出て、きれいに育つようです。

現在の我々は肥料のやり過ぎと、伸び放題の枝も切らずに剪定を忘れているのではないかと心配しています。

そして指定管理者制度は、この心配とは全く逆の方向に進みそうで心配です。

（本輝夫・金沢市）

■業界では！

この業界では、「仕事が出来れば格好や言葉使いはどうでもいい」と云うようなことをしばしば聞きます。

小屋に乗り込みさんならそれでよいかもしれません。しかし小屋番としてホールに付いている技術者はこうも行かないのではないでしょうか。ネクタイをして舞台に立てとは云いませんが、やはりお客様の見るところではあります、それなりの格好があると思います。

技術者は裏方ではありますがお客様と直接顔を合わせホールの顔ともなります。技術者の印象で利用者は今後のリピーターになっていきます、ひいてはホールの利用率アップにも繋がります。自分も今一度振り返ってみようと思います。（出井稔師・都城市）

■もしも私が理事長になったら！？

一人では不可能なことを、多くの力の結集と知恵でやり遂げるために様々な団体が作られる。成し遂げるには、みんなの「志」を一つにして立ち向かわないと先へ進めない。それを束ねていく作業も大変である。芝居作りも同様である。

次世代を担う連盟会員の方々に、"もしも私が理事長になったら"という大きな心で、「◎◎して欲しい」ではなく「◎◎したい」と「志」を述べていただいた。（編集子）

****

今連盟が始めたことが大きく変わることはないと思う。

１種と３種の合同講座（検定）は、その地域の利用者と技術者とのコミュニケーションの場として、劇場ごとに行うように推進する。何より、その劇場の利用者の方に、裏方の仕事を理解して頂くことが大切である。

また、そのためには劇場の技術者が、自分の仕事を正しく理解する必要がある。

これは、自らが気づくことがない限り正しく理解できないと思う。

そのためのプログラムを用意したい。今、思いつくのは、連盟の仲間の普段の仕事を見学する、もしくは一緒にやるとかが一番良いと思う。人に見られて仕事をする。人の仕事を見る。内緒で見たり、見られたりもよいかもしれない。

素晴らしい劇場技術者になれるキッカケを与えられるような事業を展開していき、その結果、

自分たちだけの話から抜け出よう！

裏方スタッフの地位向上につながるよう努力したい。　（内山信行・群馬県）

****

現在のところ、進行・照明・音響の横の繋がりにおいては、連盟の設立とともに、少しずつではあれども進んでいると思われます。

ただ舞台に関わる仕事は、他に受付・案内等の事務や電気・空調等の設備、清掃・警備等多岐に渡るので、その方達との意見交換・交流等を図ってゆくことも必要であると私は考えています。　（羽田野晋嗣・埼玉県）

****

先輩達は多くの技術を残してくれた。この技をどう受け継いでゆくか・・・。ただリピートすることではない。これらを、社会の中での確固たる地位とともに、残してゆくことが必要だ。

これからの舞台技術者は、職人として個人の技術向上だけを目指すのではなく、基礎の部分でまとまることが必要だ。その上に個々の特徴が光る。そんな幹となる組織をつりたい。

（高橋洋平・北海道）

****

私は会員としてやりたいことは山ほどありますが理事長になって何かをしようという考えは持ってはならないと考えています。広く会員の合議によって進む先は決められるべきで、会員を集めた時点でその団体は創立者のものでも理事長のものでもありません。会員の合議によって決められた事がトップによって潰される事例を他団体で何度も見てきました。また、トップが何でも細かいところまで決めて下にやらせていると、言われたことしかやらない、羊のような会員の群れになってしまいます。

そのような団体に未来はありません。ですから若い世代は既存の団体に期待をしていませんし入会もしてこないのです。

もし万が一にも理事長になってしまうような破目になったらやるべきことは只一つ、その団体を、異なる価値観を持つ者同士が共存できる緩やかな大きな器にする、それだけです。やりたいことがあったらトップの座を辞し、自分の案を価値観の異なる会員の批判に晒してからにすべきです。

（石丸耕一・東京都）

■劇場技術者検定について

初めての劇場技術者検定は、６月３日、４日に埼玉県・桶川市民ホールで開催した。

今回は第１種と第３種を実施し、参加人数は少なかったが北海道の旭川市や宮崎県の都城市など、遠方からの参加があった。講師は経験豊かな方々で、説得力のある講義が受講者の心に響いていた。

また、市民のための第３種を合同で実施したことについて、高度な技能を持つ方々ほど有意義に思っているようである。

この事業は、危ないから素人は近寄るなではなく、プロの仕事の凄さを知っていただくことで、プロの技を一般社会へのアピールに繋げようとしている連盟の姿勢である。

検定を開始するにあたっては、１年がかりで理事会で協議をし、会友のパシフィックアートセンターの小川富市氏には指定管理者の立場から幾度もご意見をいただき修正を重ねてきた。小川氏は、ことあるごとに若い人の意見を聞いてみますと述べられ、その言葉に感化された私も、いくつかのホールを訪問して意見を聞いて回った。そして、特に松戸市民劇場の福田義明さんや桶川市民ホールの羽田野晋嗣さんの現場の共通意見を参考にさせていただいた。

講師は五十嵐裕さん、石丸耕一さん、小坂部恵次さん、橋田克美さん、齋藤譲一さん、代田智子さん、高橋三十四さん、羽田野晋嗣さん、町田直子さん、八板賢二郎で、ボランティアでやっていただいた。また、桶川市民ホールの共催を得て実施した。

危険度の高い実技なので少人数で実施しなければならない。コツコツと辛抱強くやっていかなければならない事業である。

（事業担当理事・八板賢二郎）

受講者・受験者のご感想

◎第１種（プロ対象）

・自分がやってきたことの見直しにもなり、知っていたつもりでも実は半分くらいしか知っていなかったことが分かり勉強になりました。

・３種の方々（一般市民）と一緒にやっていくのはとても良いと思いました。この方法が全国各地に広がり、その土地の技術者と利用者の輪が広がるのが望まれます。

・今後は是非、２種の検定試験、もしくは連盟認定の講座をたくさん開催していただきたいです。

・本日はありがとうございました。日ごろ職場で気づくこと、知りたいことが出てきた場合に、連盟のホームページやメールで、いつでも質問ができる状態であると嬉しく思います。

・舞台業務について、もう少し時間をかけてほしかった。初めての開催で、時間的に少し厳しい感じがしました。

・このような研修は、自分の仕事を振り返る意味でも、大変良いことだと改めて感じました。これからは、いつも初心を忘れずに、広い視野を持って仕事を続けていきたいです。

・システマチックに舞台進行について勉強でき、とても充実した講座でした。今後もさらに、このような講座が組まれることを願っています。また、演出の仕方なども一緒に組んで講座を開いていただけたらと思います。講師の方々のレクチャーは丁寧で、とてもわかりやすく勉強になりました。

・教科書は、労働基準法まで入っていてビツクリ！とても素晴らしいと思います。ズバリ記載されていて分かりやすいと思います。こうした教科書があると助かります。本当に参加して良かったと思います。ありがとうございました。

・初めて舞台進行の仕事をしましたが、緊張とともに、楽しさや、役者さんに素敵な舞台を演出させるという生きがいを感じることができました。
・形式的でなく、フランクな雰囲気の中での講習がとてもよかったです。いろいろな立場、年齢の方々とご一緒できて、大いに刺激を受けることができました。会館を管理するものとして、改めて安全管理を意識しました。

◎第３種（市民対象）
・学生を無料にしてくださったのは、とてもありがたかったです。
・2,000 円で、このようにたくさん教えていただき感謝します。
・各部門ともわかりやすい説明だったので、未経験の者にとっても吸収しやすかったです。
・予約、打ち合わせ、仕込み、本番、撤収で、講習会を進行しても面白いかと感じました。
・自分の専門外のことを知ることができ、また、多くの方々との出会いがあり、今後の自分の大きな力となりました。講師の先生をはじめ、会館の皆様、また受講者の皆様に感謝いたします。２日間、ありがとうございました。
・700 人のホール（桶川市民ホール）で、これだけ多くのことができるなんて、他の劇場のことも知りたくなりました。

■創り手の顔が見えるモノ創りを目指して

貝塚市文化振興事業団／コスモスシアター

スタッフ表記への経緯

我々が日頃携っている、舞台芸術の非日常的な演出空間や創造制作支援の仕事は、観客に夢を売る仕事の手足だと言い聞かせていた頃もあった。確かに、数多くの作品造りに参加し、公開された作品を観た人に感動や夢・希望を与えていただろう。そのため、時には自分を犠牲にし、偽り、職人気取りの鎧を纏い、綺麗ごとのために失った物もある。しかし、それ以上に、得た経験と知識や知恵は、自分にとってより大きな自信に繋がったように思える。「今、時代の流れと現状と未来を見据え、職務の遂行と個人の充実を考えてみても良いのではないか。」と自問して思い当たったのは、映画や TV 番組の仕事に携っていた時に、エンドロールに自身の名前が出るのを嬉しく思い、次の仕事に対する励みと自信に繋がったことである。それが何時しか、自信から大きな責任感へと変化したのは当然のことである。

７年前に公立文化施設に職責を移し、制作室において小屋守と事業の企画制作の指揮を執ることになったが、自主制作の創造作品を、ホールから文化庁に助成金の申請をする場合に、「芸術監督またはこれに準ずるスタッフを有すること」や「舞台芸術に関する企画・制作について相当の実績を有すること」及び「文化会館・劇場・ホール等においては、舞台公演に関する企画・制作についてそれ相応の知見と経験を有する人材が配置されていること」などの基準を設けた創造性に高い公演を支援するものがある。

たまたま過去の作品において自身の名がクレジットされていたことが幸いし、これらのハードルをクリアーできた経験から、スタッフのキャリアの蓄積証明の一つになればと考え、当館（コスモスシアター）では公演に携わるすべてのスタッフ名の表記に踏み切った。

これはスタッフの意識の向上と、延いては裏方の社会的立場のさらなる確立を図るために、必要不可欠だと思っている。また「観客（市民)」にとって顔の見えない「裏方」の氏名を、ポスターやチラシ等の宣材に QR コード化したものを掲載、ホームページにおいてはフルネーム（社名入り）で表記をすることにより、重要課題と考える「創り手の顔が見えるもの創り」を確立し、創造活動において、市民とより一層の意識の共有が必要と考えたからである。

出来て当たり前をどう捕らえるか

劇場を管理運営し公演を実施するに当り、数多くのスタッフが共に働いている。早朝より清掃して開館準備をするクリーンスタッフや、チケットセンターに防災センターなども直接的なかかわりではないが、公演を支える重要なセクションである。例えば防災センター管轄の空調等に関して、仕込み時の暑い寒いや、スモークマシーンやドライアイスを焚く時の空気の流れ、幕類の昇降時のあおり具合などで、始めて気になってくる。観客席の温度管理では、１階と２階の温度差についても、防災センターの任切りではないだろうか。

創造・制作現場では、プロデューサや演者・演出家などの多種多様な要求に、舞台監督をはじめとする全スタッフが知恵を出し合い、信頼関係の中で作り上げて行く。また、ツアークルーを迎えての現地支援作業時の増員スタッフとなると、最悪の状況では仕込み作業の労力軽減と、時間短縮のための頭数の話になるが、演出空間に技術、視覚、聴覚、感覚的な全てにおいて最高の環境を整え、演者に提供する。裏方である以上は、出来て当たり前のことで当然±0 である。演者は演じきり、裏方は創造を支えきり、観客に大きな感動を与えるために、個々の能力と責務を集結する。終演後、自身の役割を果し、大いなる自己完結ができるかどうかの、意識改革が必要ではないだろうか。

クレジットによる心地よい緊張感

指定管理者制度の導入により有期限の身分保証になり、制作や技術の人材育成の先行きに不安が残ると共に、劇場職員や、創造事業を意識しない企業の参入により、厳しい状況下に突入した舞台技術専門会社のスタッフとは、若干の立場の違いはあるが、クレジットされることで、コスモスシアターでは職員はじめ舞台芸術支援員(当館の舞台技術スタッフの名称)や、ホール

で働くすべてのスタッフに程良い緊張感が、生まれているようだ。
　自身も、改めて自主創造事業のチラシやポスターに印刷されているQRコードを見て、襟をただし、気持ちが引き締まる思いである。
　劇場を中心に働く、数多くのセクションのスタッフに思いが浸透し、互いの立場の尊重と、敬意の中から舞台芸術の制作環境を整えたい。また、当館が全公文に提案している「公共文化施設舞台芸術研究会／SASA」が制作する音楽企画公演を通じて、各地の舞台技術スタッフと出会い、技術支援や共同制作にも参加していただきたく思う。
（専務理事兼制作室長・山形裕久）

[日本劇場技術者連盟は、劇場スタッフのクレジット推進をしています。コスモスシアターをお手本にして、少しずつ、この運動を広めて行きたいと考えています。桶川市民ホールでも、楽屋廊下に劇場技術者の氏名を掲示しました]

■平成20年度定時総会報告

平成20年5月7日 15:00～16:30
会場　埼玉会館会議室D5

第1議案　2007年度事業報告
・主催イベント
　裏方の教養講座「歌舞伎モノがたり」
　セミナー「指定管理者時代を生きる」

・協賛イベント
　有限責任中間法人日本音響家協会主催
　全日本マイクケーブル・8の字巻コンテストに協賛。

・会報／幕内瓦版を3回発行

第2議案　2007年度会計報告
　五十嵐会計担当理事から報告があり、質疑応答の後、満場一致で承認。

第3議案　役員改選
　初年度の役員任期が1年のため、役員改選となり、協議の結果、以下のとおり決定。
・理事
　齋藤　譲一　埼玉会館
　小坂部恵二　水戸芸術館
　八板賢二郎　国立能楽堂
　山形　裕久　貝塚市民文化会館
　五十嵐　裕　パシフイックアートセンター
　石丸　耕一　明治座舞台株式会社
　出井　稔師　都城まちづくり株式会社
　羽田野晉嗣　株式会社サイオー
　山形　　等　札幌市教育文化会館
・監事
　高橋三十四　桶川市民ホール

第4議案　2008年度事業計画
　八板事業担当理事から計画案が提示され、質疑応答の後、満場一致で承認。
1、新技術に関するセミナー開催
2、検定実施（埼玉県、その他）
　6月3日～4日桶川市民ホールで開催計画進行中。
3、誌上座談会（指定管理者時代に生きる2）
4、劇場技術者クレジット普及活動
5、職能持続プログラム実施
　劇場技術者を取り巻く環境は、日々、変化しています。したがって、職能検定等で資格を取得しても、日常の研鑽を怠っては人材として不適格です。
　そこで、真面目に努力して、日常的に確かな知識と技術の習得に励んでいる劇場技術者であることを証明する制度を設ける必要があります。この制度は、劇場技術者の職能を持続させ、自らの能力を表示することで、劇場を利用する市民、イベントの主催者、劇場管理者が適切な人材であるかを選択できるようにすべきです。
　そこで日本劇場技術者連盟は、時代に即した人材を確保するために、職能持続プログラムを設けて、会員の技能とモラルを継続的に向上させ、その実績を一般社会からも見えるようにします。

第5議案　2008年度予算案
議長から提示され予算案を検討、修正の後、承認。
(詳細はホームページに掲載してあります)

■平成20年度第1回理事会報告

平成20年5月7日 16:30～16:45
埼玉会館会議室5D
出席理事　小坂部恵二、五十嵐裕、石丸耕一
　　齋藤譲一、出井稔師、羽田野晉嗣
　　八板賢二郎、山形裕久
出席監事　高橋 三十四
　互選により理事長と副理事長、会計担当理事を次のとおり決定。
理事長　　齋藤　譲一
副理事長　小坂部恵二、八板賢二郎
　　山形　裕久
会計担当　五十嵐　裕

発　行　日本劇場技術者連盟
発行人　齋藤　譲一
編集人　八板賢二郎
発行日　2008年6月20日